口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区気象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方気象台

＜噴火警戒レベルを２（火口周辺規制）から３（入山規制）に引上げ＞

口永良部島では、４月上旬から山体の浅いところで地震活動が活発化し、火山性地震が多い状態となっています。火山性地震は主に古岳火口付近で発生しています。

GNSS 連続観測では、2023 年６月下旬頃から 10 月頃にかけて古岳付近の膨張を示す変動が観測されており、現在も膨張した状態が維持されています。

以上のように口永良部島では火山活動が高まった状態となっていることから、本日（11 日）21 時 00 分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを２（火口周辺規制）から３（入山規制）に引き上げました。

【防災上の警戒事項等】

新岳火口及び古岳火口から概ね２kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況

口永良部島では、４月上旬から山体の浅いところで地震活動が活発化しています。古岳火口付近を震源とする火山性地震が多い状態となっており、５月には振幅のやや大きな火山性地震が時折発生しました。新岳火口付近においても地震活動が継続しています。

GNSS 連続観測では、2023 年６月下旬頃から 10 月頃にかけて古岳付近の膨張を示す変動が観測されており、現在も膨張した状態が維持されています。

口永良部島では火山活動が高まっていますので、新岳火口及び古岳火口から概ね２km の範囲、及び向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html
この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。
資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50ｍメッシュ（標高）』を使用しています。
噴火警戒レベルの判定基準表については気象庁ホームページを御覧ください。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/filing/level_kijunn/keikailevelkijunn.html

４月以降、火山性微動及び新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されていません。また噴煙の状況に特段の変化はなく、新岳では白色の噴煙が最高で火口縁上 600ｍまで上がりました。本日（11 日）は白色の噴煙が最高で火口縁上 70ｍまで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は観測されませんでした。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、４月以降は１日あたり 20～80 トンと少ない状態で、４月上旬には検出限界を下回る日もみられました（６月４日の観測では１日あたり 30 トン）。

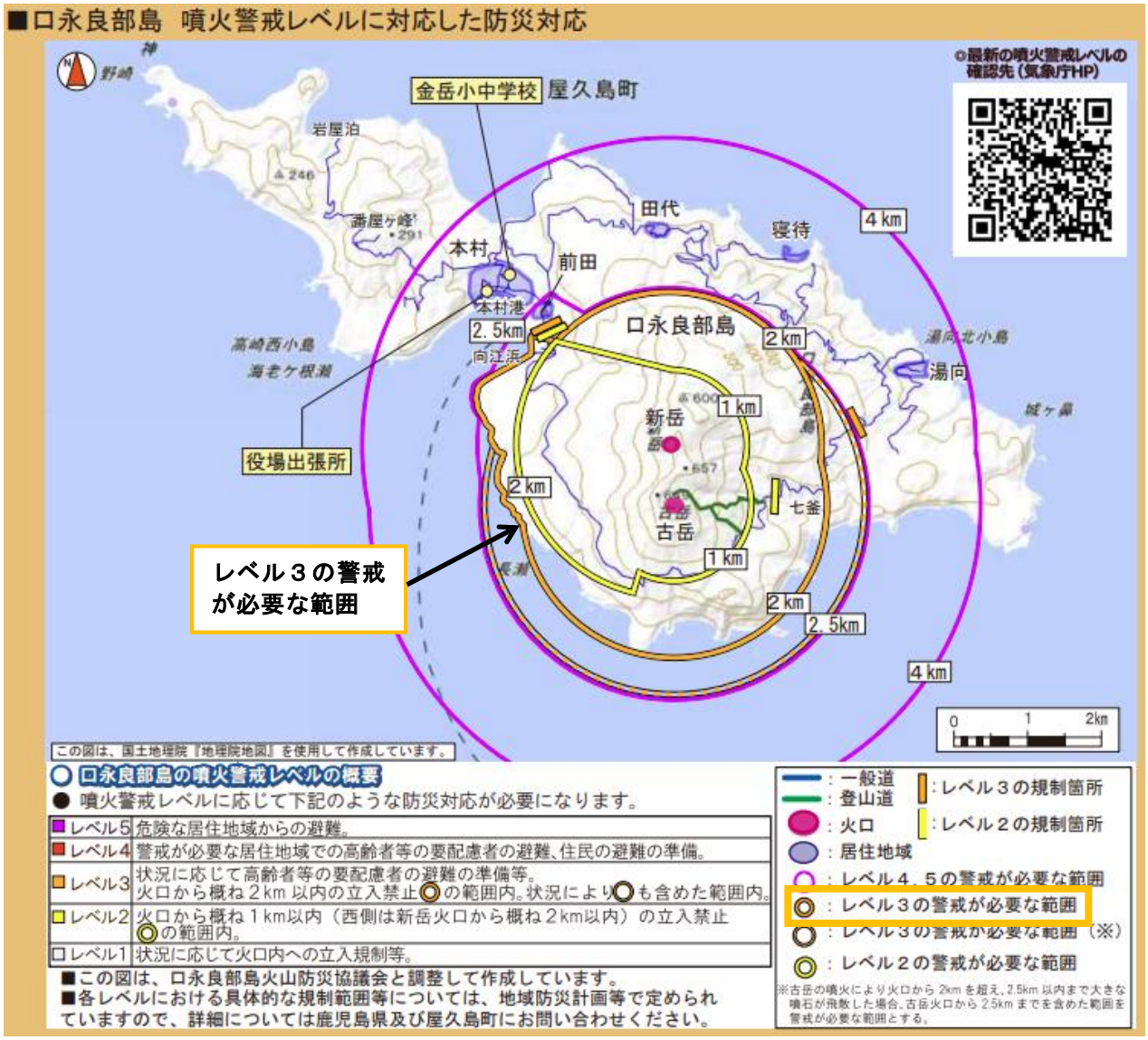

図１　口永良部島　警戒が必要な範囲

新岳火口及び古岳火口から概ね２kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

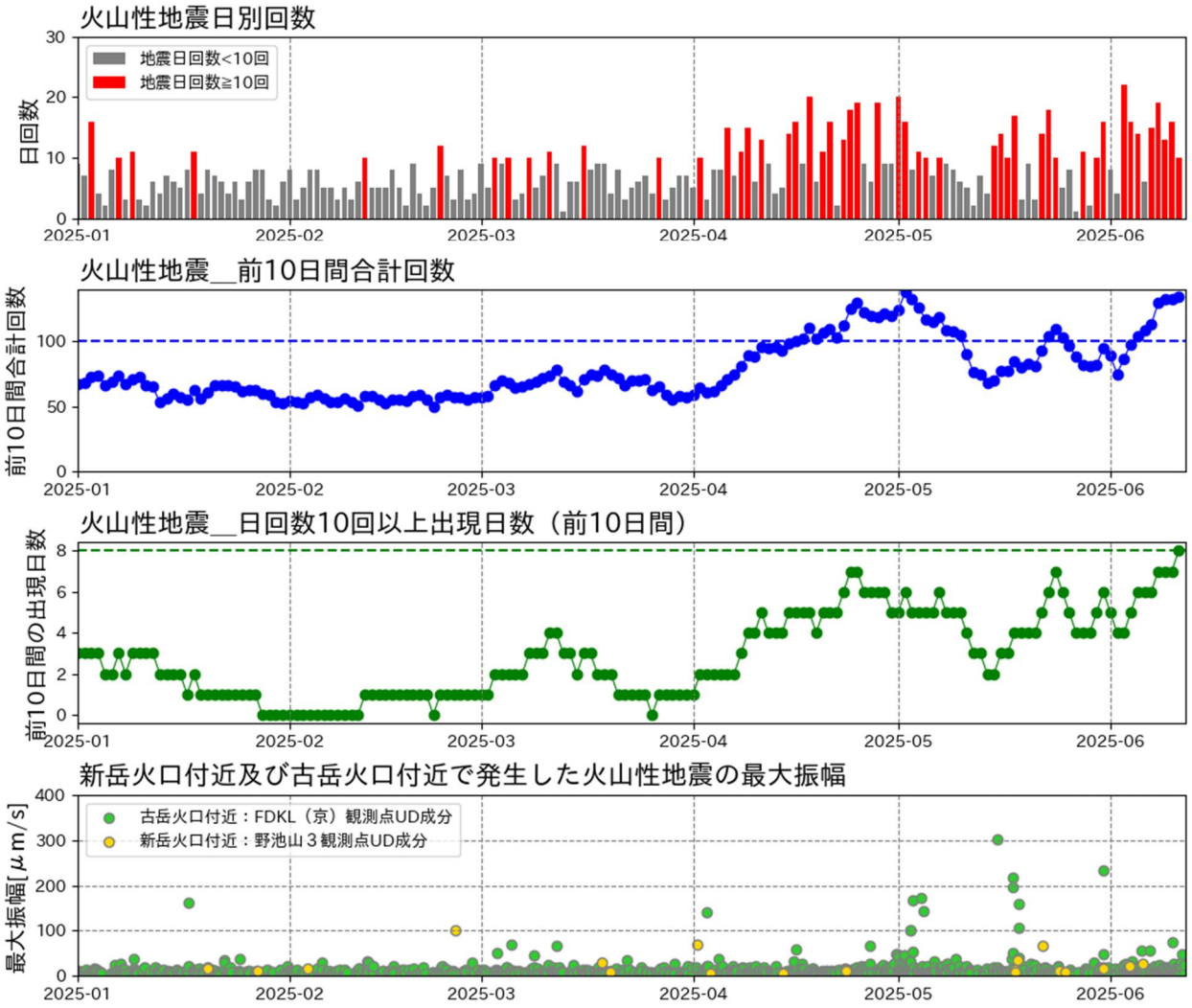

図２　口永良部島　【１段】火山性地震の日別回数、【２段】火山性地震の前 10 日間合計回数、【３段】火山性地震の日回数 10 回以上の出現日数（前 10 日間）、【４段】新岳火口及び古岳火口付近で発生した火山性地震の最大振幅（2025 年１月１日～６月 11 日 21 時まで速報値）

・４月上旬から山体の浅いところで地震活動が活発化しています。
・古岳火口付近を震源とする火山性地震が多い状態となっており、新岳火口付近においても地震活動が継続しています。火山性地震は６月２日から本日（６月 11 日 21 時）までの 10 日間に 135 回発生しています。
・古岳火口付近では、５月には振幅のやや大きな火山性地震が時折発生しました。

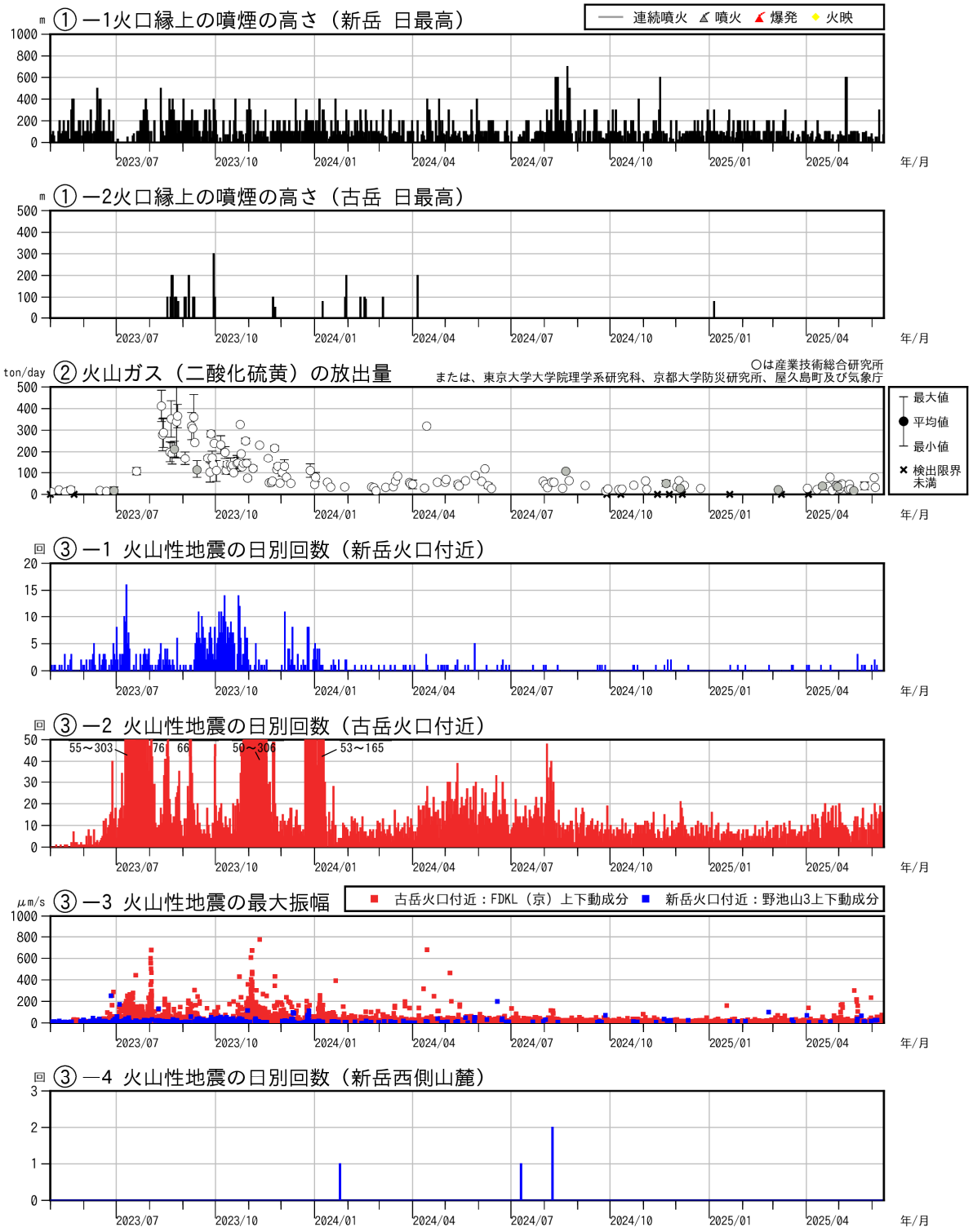

図３　口永良部島　最近の火山活動経過図（2023 年５月～2025 年６月 11 日 21 時まで速報値）

＜４月以降の概況＞

・噴煙の状況に特段の変化はなく、新岳では白色の噴煙が最高で火口縁上 600mまで上がりました。本日（11 日）は白色の噴煙が最高で火口縁上 70mまで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は観測されませんでした。

・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、１日あたり 20～80 トンと少ない状態で、４月上旬には検出限界を下回る日もみられました（６月４日の観測では１日あたり 30 トン）。

・４月上旬から山体の浅いところで地震活動が活発化しています。古岳火口付近を震源とする火山性地震が多い状態となっており、新岳火口付近においても地震活動が継続しています。

・古岳火口付近では、５月には振幅のやや大きな火山性地震が時折発生しました。

・新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されませんでした。

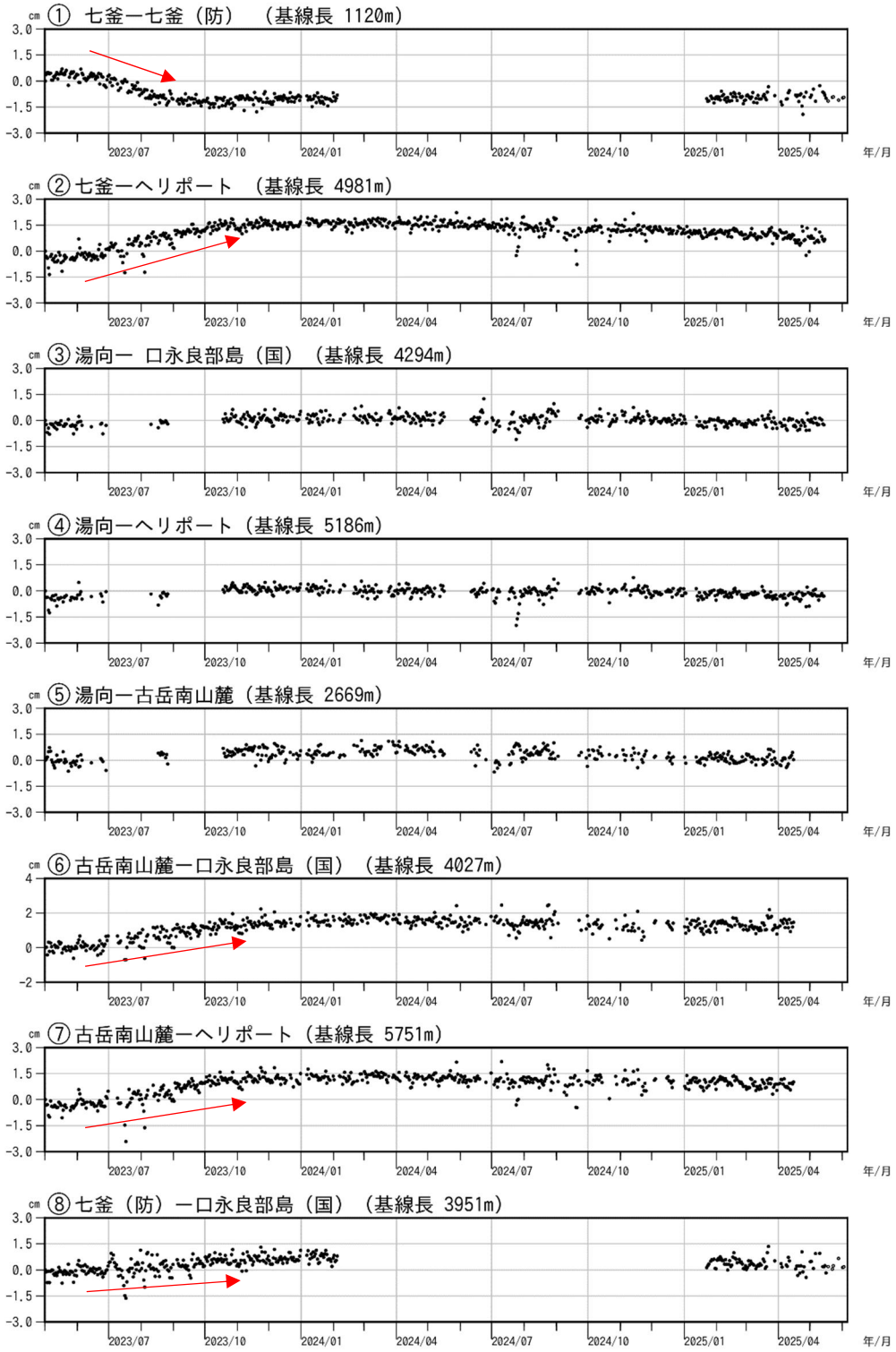

図４　口永良部島　GNSS 連続観測による基線長変化（2023 年５月～2025 年６月 10 日）

GNSS 連続観測では、2023 年６月下旬頃から 10 月頃にかけて古岳付近の膨張を示す変動が観測されており（赤矢印）、現在も膨張した状態が維持されています。

これらの基線は図５の①～⑧に対応しています。
基線の空白部分は欠測を示しています。
2023 年３月 23 日の観測点修繕工事（七釜観測点）に伴うステップを補正しています。
（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所

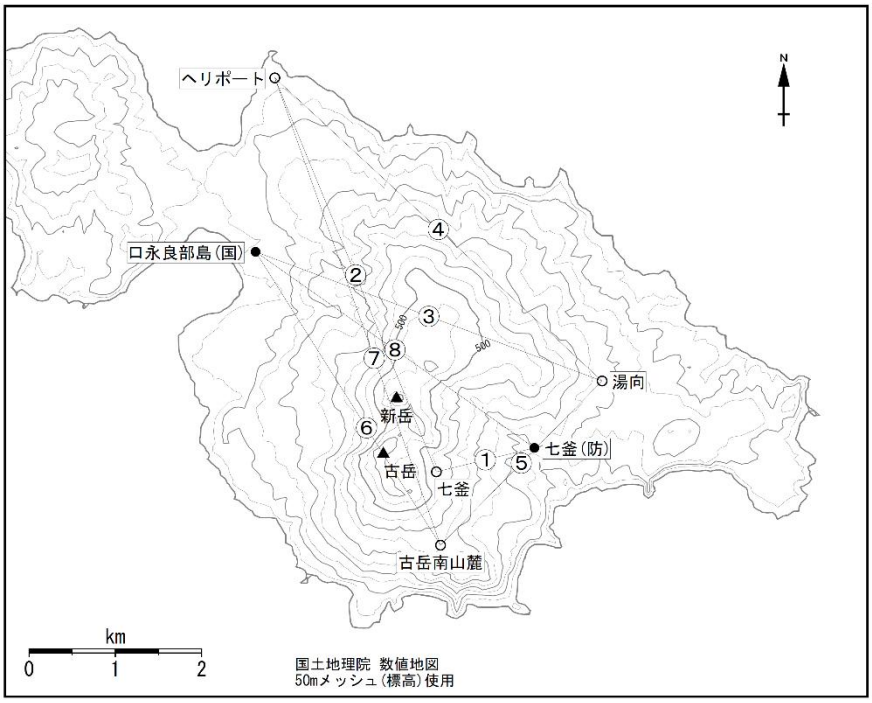

図５　口永良部島　GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所

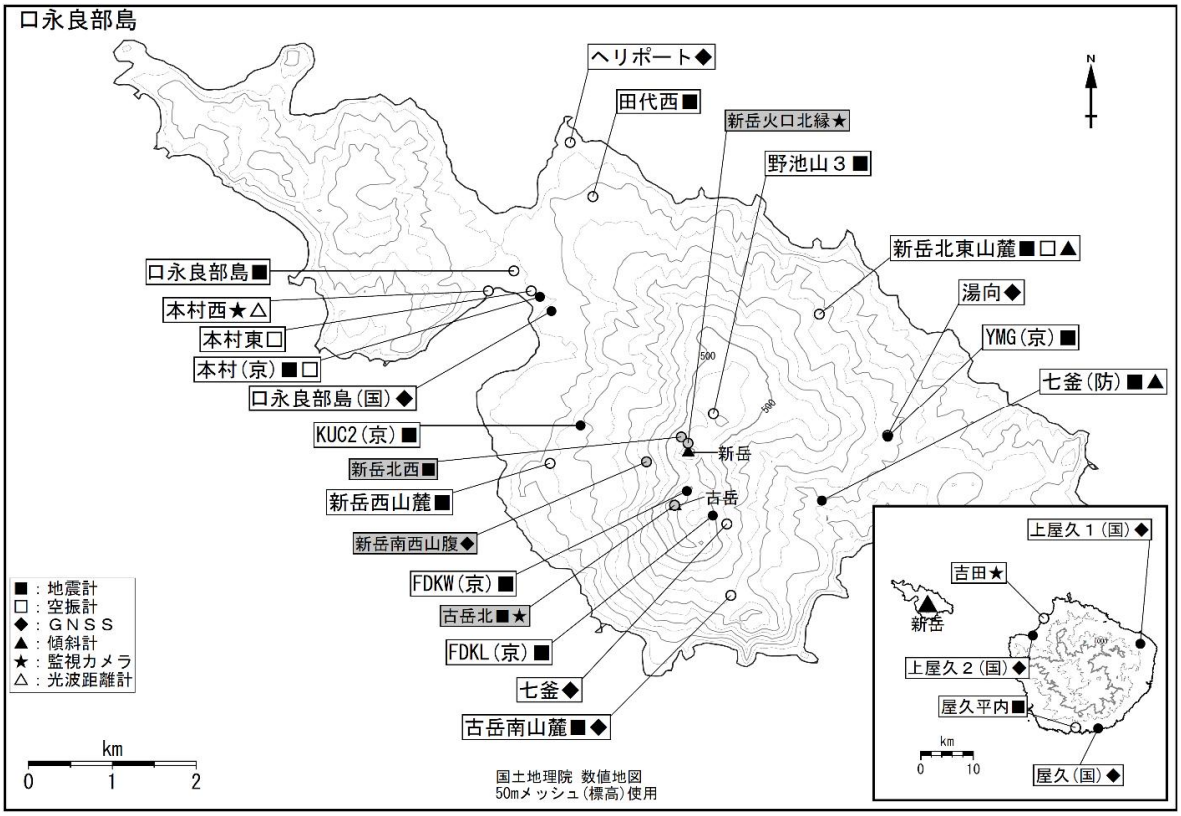

図６　口永良部島　観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院、（京）：京都大学、（防）：防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。